

格助詞「に」と「へ」の使い分けについて

—— アンケート調査の分析を基に ——

郭 潔・林 伸一

1. はじめに

格助詞「に」と「へ」に関しては、日本語母語話者も意識して使い分けしているとは限らない。例えば、「学校に行く」と「学校へ行く」は、go to school と go to the school の違いに相当するとも言われる。前者が「毎日学校に行って勉強する」という習慣的な行為を含意するのに対して、後者は「学校の建物があるところへ向かっては行くが、中に入って勉強するとは限らない」と解釈できるからであろう。両者ともに動作主の動作の向かう方向は「学校」であり、意味内容も非常に近似している。人によっては、もっぱら「へ」を使用しているか、逆に「に」を慣習的に使用しているなど日本語母語話者の個人差もあるだろう。しかし、もし意味の差異がないのであれば、時間の経過とともに「に」か「へ」かいずれかの格助詞が淘汰され、一本化されると思われる。格助詞「に」と「へ」に関しては、日本語母語話者が意識的あるいは無意識に使い分けしていて、それぞれに存在理由があると思われる。

2. 研究の目的と意義

場所格としてだけでなく、人間関係の心理的距離の遠近によっても使い分けの基準があるとの仮説を立てて格助詞「に」と「へ」の機能の相違を明らかにしたい。

格助詞「に」と「へ」に関しては、主として「に」が密着性を表現し、「へ」が方向性を表現するという点で、役割分担があるという点を第1の仮説としたい。

次に「に」が心理的距離の近い同等あるいは対等にあたる人間関係の場合に用いられ、「へ」が心理的距離の遠い場合や目上などの人間関係の場合などに用いられる傾向があることを第2の仮説としたい。日本語母語話者が直感的に格助詞「に」は友達や親子など広く用いられるのに対して、「へ」のほうは目上の人に対して丁寧で改まった公的な場面に用いられるとする待遇的な使い分けをしていることを明らかにしたい。

そうすることにより日本語非母語話者の学習者が日本語を学習する際に、使い分けの目安が得られると思われる。また、日本語母語話者にとっても助詞の使用における混乱を避け、適切な助詞の使い分けの整理の一助となることが期待される。

3. 先行研究

3-1. 「格助詞」について

格助詞は、助詞の種類の一つであり、体言または体言に準ずるものに付いて、それが文中で他の語とどんな関係になるかを示すとされている（『デジタル大辞泉』）。格助詞の種類は「が」

「の」「を」「に」「へ」「と」「より」「から」「で」と9種類ある。本報告では、その中でも格助詞「に」と「へ」に絞って検討する。

格助詞に関する先行研究において、「へ」は敬意の度合いの高い丁寧な言い方をする際に使用すると示したものは見当たらず、敬語に関する文献、冠婚葬祭でのマナーに関する文献においても同様であったと村上（2011）は報告している。

北原（2007）は、方向句を選択する移動動詞として「向かう」を採り上げ「春子が駅へ／駅に向かった」という例文に関して「へ」と「に」の違いを検討している。例文は、「春子」が事象終了時に事象開始時よりも「駅」に少しでも接近していれば、「駅に向かった」が成り立つとしている。

3-1-1. 格助詞「に」

『新版日本語教育辞典』において、「に」は八つの用法があると書かれている。以下にその用法を示す。

- (1) 場所……「机の上にある」「大阪に住む」
- (2) 着点……「美術館に行く」「ゴミ箱に捨てる」「大人になる」
- (3) 相手……「友達に会う」「先生にもらう」「母に相談する」
- (4) 受け手……「私には分かる」「子供には難しい」
- (5) 起因……「大きな音に驚く」「寒さに震える」
- (6) 方向……「東京に向かう」「南北に長い」
- (7) 目的……「見物に行く」
- (8) 時……「午前10時に開店する」

このように、「に」は9種類の格助詞の中で最も多くの機能・用法を持っており、使用状況によっては他の格助詞に置き換えられたりすることもあるとされている。

3-1-2. 格助詞「へ」

『新版日本語教育辞典』において、「へ」は「方向」の格助詞として「職場へ向かう」を例文としてあげている。各格助詞の中でも「へ」は、特に持ち合わせている機能・用法が少ない格助詞である。益岡・田窪（1989）も「大阪へたつ」や「故郷へ帰る」のような「方向・目的」で使用されると記述している。

3-2. 村上（2011）の調査

9種類の格助詞のうち、村上（2011）は「に」「へ」「を」「から」「と」の5種類についてアンケート調査を実施し、検討している。実施期間、回答者数は以下の通りである。

- ・実施期間：2010年7月～同年9月
- ・有効回答者数：447名（男性：162名、女性：285名）
- ・職業別内訳：学生117名、社会人320名、無記入10名
- ・年齢別内訳：10代53名、20代90名、30代100名、40代93名、50代78名、60代以上33名
- ・質問項目数：28（別途自由記述欄あり）

4. 本研究方法・分析方法

4-1. アンケート調査

本報告は、村上（2011）の調査結果を基に、さらにサンプル数を増やし、調査研究を追試する形で実施した。

村上（2011）の調査用紙から格助詞「に」と「へ」「から」に絞った質問項目15に限定して、簡易版のアンケート調査用紙を作成し、使い分け調査を実施した。なお、アンケート調査は日本語母語話者のみを対象に集計した。

また、同調査用紙には、格助詞についての感想や意見などが書き込めるように自由記述欄も設けた（別添資料1参照）。

4-2. アンケートの概要

・実施期間：2011年4月～同年8月 有効回答者数：638 無効回答者数：6

表1. 性別の内訳（単位：名）

女性	男性	合計
400	238	638

表2. 職業の内訳（単位：名）

学生	社会人	その他	合計
346	240	52	638

表3. 年齢別の内訳（単位：名）

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	合計
191	166	58	93	67	39	20	4	638

表4. 出身地の内訳（単位：名）

山口	岡山	長崎	福岡	広島	大分	島根
248	77	67	50	50	35	27
佐賀	徳島	大阪	宮崎	愛媛	熊本	兵庫
22	10	7	7	5	4	4
高知	鹿児島	長野	東京	香川	茨城	奈良
3	3	2	2	2	2	2
北海道	神奈川	埼玉	京都	鳥取	岐阜	富山
2	2	1	1	1	1	1

以上合計 638

4-3. アンケートの全体集計と考察

設問1～15の質問項目のうち設問14と設問15は、格助詞「に」と「から」に関するものなので、集計から除外し、設問1～13の結果を表と図で表し、以下に示す。なお、表における百分率表示では、小数点第2位を四捨五入し、小数点第1位までを表示する。

設問1. 絵を壁（へ・に）かける。

表5. 設問1の集計（n=638）

選択項目	選択人数	選択率（%）
へ	23	3.6
に	615	96.4
差異	592	92.8

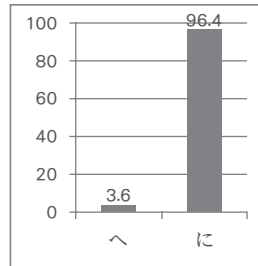


図1. 設問1の選択率（%）

設問1は、益岡・田窪（1987）から抜粋したものであり、原文は「絵を壁にかける」である。96.4%の回答者が「に」を選択し、原文が強く支持された。この場合の「に」は着点を表す格助詞であり、着点の「に」のうち目的地以外のものは「へ」で置き換えにくいと益岡・田窪（1987）は説明している。『新版日本語教育事典』にも「動作後、対象物がその場所に行き着いた状態であることを表すにも『へ』は適さない」と記述されている。設問文の「絵」と「壁」の密着性が「に」によって示されているとも言える。

設問2. ふりかけをご飯（へ・に）かける。

表6. 設問2の集計（n=638）

選択項目	選択人数	選択率（%）
へ	26	4.1
に	612	95.9
差異	586	91.8

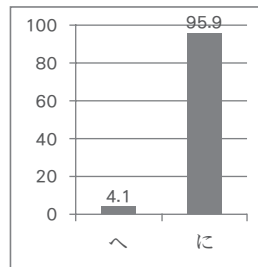


図2. 設問2の選択率（%）

設問2は、検索エンジンGoogleを用いて「にかける」で検索・検出された文「ふりかけをご飯にかける」である。95.9%の回答者が「に」を選択し、設問1同様に原文が強く支持された。これは、「ご飯」と「ふりかけ」の密着性が「に」によって示されている例とも言える。

設問3. 友達（へ・に）かける言葉が見つからない。

表7. 設問3の集計（n=638）

選択項目	選択人数	選択率（%）
へ	117	18.3
に	521	81.7
差異	404	63.4

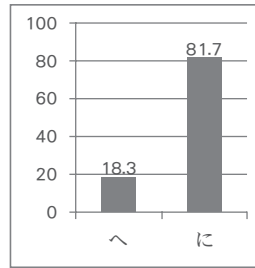


図3. 設問3の選択率（%）

設問3に関して検索エンジンGoogleを用いて、「友達『へ』かける言葉」と「友達『に』かける言葉」で検索したところ、多く検出されたのは「友達にかかる言葉が見つからない」であった。回答者が「に」を選択した選択率は81.7%である。

この場合の「に」は、人間関係における行為の対象を示す格助詞である。森田（1989）は、行為の対象を示す「に」について「彼に…伝える／質問する」のような「へ」の発想に近い、動作の相手に対する動作主の一方的行為の他動詞が立つ場合と、「彼に…束する／話す」のような「と」との入れ替えが可能な、相手方との協調を期待する動作動詞が立つ場合との二種類があるとしている。設問3の文章は、動作主の一方的行為の他動詞が立つ場合に該当する。

さらに「へ」について、助詞を伴った「母への手紙」や「学校への連絡」のような「～への…」形式以外の「へ」を使用した用法は「に」と用法が重なるため、多くは「に」形式で表される。ここでは、「に」が心理的距離の近い同等あるいは対等の人間関係の「友達」に対して用いられた例であり、「に」を支持する回答者が81.7%という結果に達したと解釈できるだろう。

設問4. ご遺族の方（へ・に）かける言葉が見つからない。

表8. 設問4の集計（n=638）

選択項目	選択人数	選択率（%）
へ	433	67.9
に	205	32.1
差異	228	35.8

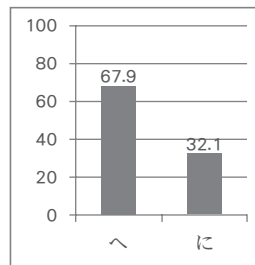


図4. 設問4の選択率（%）

設問4は、検索エンジンGoogleを用いて「へかける」で検索・検出されたものであり、原文は「遺族へかける言葉が見つからない」である。回答者の「へ」選択率は67.9%であり、「に」と35.8ポイントの差であった。

回答者から「敬意の度合いによって使用する格助詞が違う」という意見も寄せられている。敬意の度合いを上げた設問4は、設問3の原文と動作の対象以外は同じ文章であるが、選択された格助詞は「へ」と「に」が逆転する結果となった。

設問3では、動作の対象が「友達」だったため、上下関係は同等あるいは対等と考えられる。しかし、設問4の場合、動作の対象が「ご遺族」のため、上下関係は曖昧であるが、「友達」よりも敬意の度合いが高い場合であることがはっきりしている。アンケートの自由記述欄において、「『へ』は改まった言い方だと思っている」という意見が複数あり、特に多かった記述は「『へ』は丁寧な言い方をする際に使用する」と記述されている。

6割以上の回答者が、方向性を示す「へ」として選択したのか、丁寧な場合の「へ」として選択したのかは不明である。村上（2011）の調査において自由記述欄に「へ」は丁寧な言い方をする際に使用するという書き込みが十数件見られた。設問4の「ご遺族」の場合、尊敬の意を表す接頭辞「ご」がついているため、その影響を受けて「へ」を選択したとも考えられる。本研究の第2の仮説として立てた「へ」が心理的距離の遠い人に対する場合などに用いられる傾向があることが検証された例と言えるであろう。

設問5. 佐藤さんは田中さん（へ・に）プレゼントをあげた。

表9. 設問5の集計（n=638）

選択項目	選択人数	選択率（%）
へ	64	10.0
に	574	90.0
差異	510	80.0

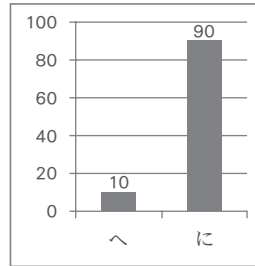


図5. 設問5の選択率（%）

設問5は、益岡・田窪（1987）から抜粋した「あなたにプレゼントをあげます」に修正を加えたものであり、調査者が予測していた文は「佐藤さんは田中さんにプレゼントをあげた」である。村上（2011）の調査では、約7割の支持率であったが、本調査では9割の回答者が予測していた文を支持した。

この場合の「に」は設問3、4と同じく行為の対象を示す格助詞である。この設問文は行為の方向を示しているので「へ」を選択してもよいが、「へ」を選択した回答者は1割に留まった。設問5は、「佐藤さん」と「田中さん」に対して用いられた例であり、両者の人間関係や上下関係が明示されていないため、「に」が心理的距離の近い対等あるいは同等の人間関係にある二人と回答者が判断し、「に」を支持する回答者が9割という結果になったと解釈できるだろう。

設問6. 生徒が校長先生（へ・に）花束を差し上げた。

表10. 設問6の集計（n=638）

選択項目	選択人数	選択率（%）
へ	353	55.3
に	285	44.7
差異	68	10.6

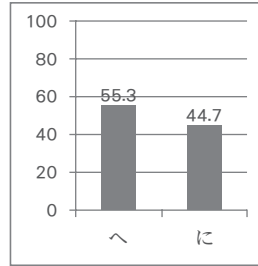


図6. 設問6の選択率（%）

設問6は、「へ」が丁寧な言い方に使われているのかを確かめるために村上（2011）が作成した設問文である。「へ」を支持する回答者が「に」を支持する回答者よりも10.6ポイント上回る結果となった。村上（2011）の調査でも、同様に10ポイントの差異を示している。

この設問文は、設問5とは異なり、「生徒」と「校長先生」のように、上下関係がはっきりしている。設問5の場合「佐藤さん」と「田中さん」との関係は、上下関係が不明で、同等の立場にあると考えて、多くの回答者が「に」を選択していたと考えられる。設問6のように上下関係が明確であり、「あげる」ではなく「差し上げる」と敬意表現を使用した設問文であったために「へ」を選択した回答者が、全体の半数を超え55.3%という結果となったと思われる。

『へへ……』という時は、『へに……』と言う時よりも距離（物理的・心理的に）があるや「敬語等、方向が明らかなものは『へ』を使ってみました」との自由記述も見られ、設問4と同様に、日本語母語話者は丁寧な言い回しをする際は「に」よりも「へ」を使用する傾向がある証拠となると言えるだろう。

設問7. 親から子（へ・に）あげるお小遣いの限度額はいくらなのだろうか。

表11. 設問7の集計（n=638）

選択項目	選択人数	選択率（%）
へ	255	40.0
に	383	60.0
差異	128	20.0

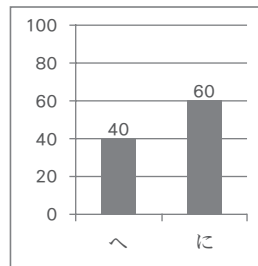


図7. 設問7の選択率（%）

設問7は、検索エンジンGoogleを用いて「へあげる」で検索・検出した「親から子へあげるお小遣いの限度額はいくらだろうか」である。「へ」の選択率が4割であり、「に」は6割と言う結果になった。村上（2011）の調査では、「へ」が42.3%、「に」が57.7%であった。

設問6と設問7では、選択される格助詞が逆転した形となっている。

設問7でも上下関係が明確になっており、「親」が目上、「子」が目下の立場のはずである。

また、動作の方向は「親から子」であり、目上から目下の動作である。設問6では目下から目上の動作だった。両設問とも上下関係を表してはいるが、親子関係の場合には設問6のように「目上」「目下」の意識がさほど強くなく、格助詞の選択も同等に近いという結果になったと考えられる。サンプル数が96の段階での集計では、「へ」と「に」の選択率がちょうど5割対5割となった。かつて日本語においても家庭内の序列がはっきりしていた時代には家庭内敬語が使われていたが、現代では身内内では敬語を用いなくなったということが本結果にも反映されているのかもしれない。

設問文7「親から子（へ・に）あげる」の動詞は「やる」、「与える」などに入れ替えると違う結果がでるのではないかという声もあった。さらに、「お小遣い」の代わりに、「着物」や「財産」のような高価なものに入れ替えると本調査結果とは異なる結果が出てくるのではないか、と言う意見も聞かれた。

また、設問文7は「親から子へ」の起点「から」と終点「へ」の方向性が示された文であり、「AからBへ」という「起点⇒終点」を意識した回答者が40%の中に含まれていると考えられる。同じ「あげる」を用いた文であっても設問5には「から」の表示がなく、実際は「佐藤さんから田中さんへ」とプレゼントが移動したという内容だが、表記上に「AからBへ」という「起点⇒終点」表示がないために「に」が9割で「へ」との差異が80ポイントとなったと考えられる。それ比べて、設問文7の選択結果は、「に」が6割に対して「へ」は4割で差異が20ポイントと小さい。

設問8. 社員から部長（へ・に）提出する書類が山のようにある。

表12. 設問8の集計 (n=638)

選択項目	選択人数	選択率 (%)
へ	356	55.8
に	282	44.2
差異	74	11.6

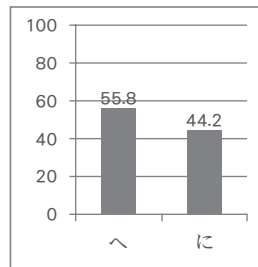


図8. 設問8の選択率 (%)

設問8は設問7と同様、「へ」に関する仮説の2を検証するために作成した設問文である。「へ」を支持する回答者が「に」を支持する回答者よりも11.6ポイント上回る結果となった。

この設問文は、「社員」と「部長」という上下関係がはっきりした人間関係を設定しており、動作の方向は目下の「社員」から目上の「部長」である。設問6では、「差し上げた」という敬意表現を使用しているが、設問8では「提出する」であり、特に敬意が込められている表現ではない。本調査結果は、敬意表現よりも「部長」と「部下」というような上下関係のほうが、

(49)

「へ」の選択率をより強めることを示している。

設問9. 彼は彼女（へ・に）渡すメッセージカードのデザインを考案中だ。

表13. 設問9の集計 (n=638)

選択項目	選択人数	選択率 (%)
へ	127	19.9
に	511	80.1
差異	384	60.2

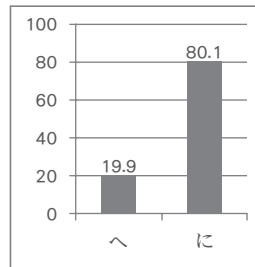


図9. 設問9の選択率 (%)

設問9は、検索エンジンGoogleを用いて「へ渡す」で検索・検出された「彼のお母さんへ渡すメッセージカードのデザインを考案中だ」に修正を加えたものであり、村上（2011）が予測していた文は「彼は彼女へ渡す…」であった。本調査結果は、「へ」の選択率が19.9%であったの対し、「に」の選択率は80.1%で60.2ポイントと大きな差異を示した。

この設問文は、設問8とは異なり、「部長」と「部下」のような上下関係表示、敬意表現は用いられておらず、「彼」と「彼女」は同等あるいは対等関係と判断され「に」の選択が多くなったと考えられる。

また、村上（2011）では、手紙やメッセージカードなどの文頭を書く「○○さんへ」と宛先を示す「へ」の影響が予想されたが、村上（2011）の調査からも本調査結果からも、さほど関係がないと言える。

設問10. 今年の春からバリの大学院（へ・に）入ることになりました。

表14. 設問10の集計 (n=638)

選択項目	選択人数	選択率 (%)
へ	181	28.4
に	457	71.6
差異	276	43.2

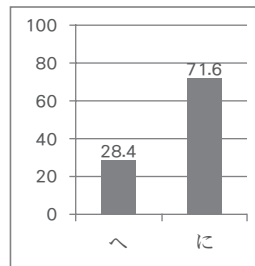


図10. 設問10の選択率 (%)

設問10は、検索エンジンGoogleを用いて「へ入る」で検索・検出されたものであり、原文は「今年の春からバリの大学院へ入ることになりました」である。ところが、調査結果によると、原文とは異なり「に」を選択した回答が71.6%と圧倒的に多かった。村上（2011）の調査結果

も「に」が69.1%とほぼ同等の結果を得ている。

森田（1989）によると、格助詞「に」は行為・作用の帰着点である場合に使用されると指摘されている。例えば「学校に行く」「仕事につく」などである。設問10に戻ると、「パリの大学院に入る」の「入る」は「行く」の意味も含意されているであろうが、「入学する」「所属する」の意味合いが強いと言える。

北原（2007）は、着点句と共に起する移動動詞を「着点指向動詞」として、「着く、到着する、（庭に）出る、入る、届く」などの例を挙げている。これらの動詞は、事態の成り行きの結果に着目する自動詞群に区分けされる。設問10の「今年の春からパリの大学院に入ることになりました」も結果に着目する自動詞文である。意味的には、動作主体が「パリの大学院」に所属するわけで、その密着性が強いとも言える。

一方、森田（1989）は、格助詞「へ」の場合、距離的、まれに時間的に離れた地点・時点などを目標として動作が進み向かう特徴があると指摘している。設問10で「へ」を選択した回答者は、「パリの大学院」という目的地に移動するという動作性に着目したと考えられる。

設問文「パリの大学院」が設定された距離的影響も「へ」を28.4%選択した理由のひとつではないかと考えられる。「パリの大学院」のかわりに、「地元の大学院」などに入れ替わると物理的距離と心理的距離の変化から「に」と「へ」の選択率も変わるのではないと思われる。

設問11. 見学者として賃貸住宅（へ・に）入る時、注意点がいくつかある。

表15. 設問11の集計（n=638）

選択項目	選択人数	選択率（%）
へ	167	26.2
に	471	73.8
差異	304	47.6

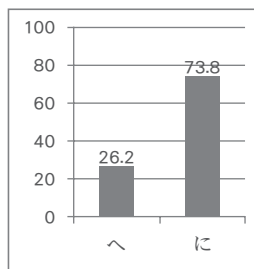


図11. 設問11の選択率（%）

設問12. 引っ越しで賃貸住宅（へ・に）入る時、注意点がいくつかある。

表16. 設問12の集計（n=638）

選択項目	選択人数	選択率（%）
へ	188	29.5
に	450	70.5
差異	262	41.0

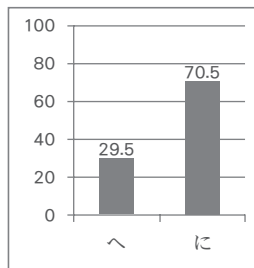


図12. 設問12の選択率（%）

設問11、12は、検索エンジンGoogleを用いて「に入る」で検索・検出された「賃貸住宅に入る時」に村上（2011）が修正を加えたものであり、さらに、引っ越しで入る場合と見学者として入る場合では使用する格助詞が異なってくるか否かを確かめるために作成した設問文である。どちらの設問でも「に」を選択した回答者が約7割という結果になった。

設問11の「見学」と12の「引っ越し」の違いについて、「見学」というのは、一時的あるいは短時間「入る」ことであり、「引っ越し」のように長期間その場から動かない場合の「入る」とは動作主の意識と立場が異なるはずだが、本調査結果からはその差異が認められなかった。

森田（1989）によると、格助詞「に」は動作の存在点・成立点である場合に使われると指摘されている。設問11で使用される「に」は、存在の中で場所を表す用法以外に「入る」という動作・作用の着点とも考えられる。設問12の「引っ越し」の場合は、現住所から、新住所に向かって全体的に移動することであり、動作の方向性を示す「へ」が選択されることが考えられる。村上（2011）は、設問12において「へ」を選択する回答者が多いと予測したが、結果としては「に」を選択した回答者が多かった。本調査結果も同様で、「見学」や「引っ越し」という目的のいかんにかかわらず、「～に入る」と動詞とのセット意識が強く、「へ」よりも「に」が多く選択されたと考えられる。北原（2007）の「着点指向動詞」としての「入る」と着点を示す「に」が一語化して用いられているとも考え得る例とも言えるだろう。

設問13. 老後の楽しみとして「日本秘湯（へ・に）入る会」に入会した。

表17. 設問13の集計（n=638）

選択項目	選択人数	選択率（%）
へ	153	24.0
に	485	76.0
差異	332	52.0

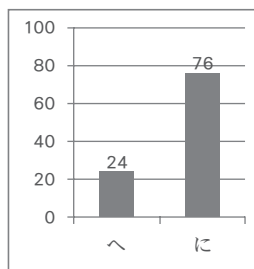


図13. 設問13の選択率（%）

設問13も検索エンジンGoogleを用いて「に入る」で検索・検出された「日本秘湯に入る会」に修正を加えたものであり、調査者として予測していた文は「老後の楽しみとして『日本秘湯に入る会』に入会した」である。本調査において、76.0%の回答者が「に」を支持した。

森田（1989）によると、「に」は「進んでその状況に加わることを示す」時に用いるとされている。設問19で「に」を選択した場合、格助詞「に」の動作の成立点と考えられ、「進んで入会してその状況に加わる」という意味になる。

動作主が「日本秘湯に入る会」に所属したわけで、格助詞「に」の密着性が現れている例でもある。

一方、「へ」を選択した回答者は、設問本の「秘湯に入る」と「～に入会した」の「に」が重なるのを避けるため「へ」を選択したとも考えられるが、その数は少ない。

5. まとめ

以上格助詞「に」と「へ」の使い分けを設問ごとに検討してきたが、ここで仮説ごとにまとめておきたい。以下に示すように四つのグループに分けて整理する。

5-1. 格助詞「に」が密着性を表現するという第1の仮説を検証する例

表18. 「へ」より「に」が優位な文

番号	設問文	へ%	に%	差異
1	絵を壁（へ・に）かける。	3.6	96.4	92.8
2	ふりかけをご飯（へ・に）かける。	4.1	95.9	91.8
3	友達（へ・に）かける言葉が見つからない。	18.3	81.7	63.4

主として「に」が密着性を表現するという第1の仮説を検証する例である。つまり、「絵」と「壁」の密着性、「ふりかけ」と「ご飯」の密着性が、格助詞「に」とともに表現されている。

具体的な事物だけでなく、「友達」と「言葉」のような抽象物においても「かける」という動詞とともに密着性の「に」が用いられている。「に」と「かける」が一語化して用いられているとも言える例である。

5-2. 格助詞「へ」が心理的距離の遠い場合や目上などの人間関係の場合に用いられるとする第2の仮説を検証する例

格助詞「へ」が心理的距離の遠い場合や目上などの人間関係の場合などに用いられる傾向があることを第2の仮説としたが、その証例を次に示す。「に」に対して「へ」のほうは目上の人に対して丁寧で改まった公的な場面に用いられるとする待遇的な使い分けをしていることを次の「へ」が優位な文が明らかにしている。

表19. 「に」より「へ」が優位な文

番号	設問文	へ%	に%	差異
4	ご遺族の方（へ・に）かける言葉が見つからない。	67.9	32.1	35.8
8	社員から部長（へ・に）提出する書類が山のようにある。	55.8	44.2	11.6
6	生徒が先生（へ・に）花束を差し出した。	55.3	44.7	10.6

上記の「へ」が優位な文は、「へ」が方向性を表現する機能分担の仮説1も同時に検証しているが、格助詞「に」も3割から4割の比率で方向性を表現する場合があることを示している。問3「友達（へ・に）かける言葉が見つからない」で「に」が多く支持されていたが、設問4「ご遺族（へ・に）かける言葉が見つからない」という設問文では、逆転して「へ」が多く支持されている。これは、アンケート回答者が動作の相手や敬意の度合いを確かめた上で格助詞を選択し、使い分けている証例と言える。

設問8は、「に」よりも「へ」の格助詞を選択する回答者が上回った。設問8は、動作主にとって相手が「目上」であり、設問4のように敬意の度合いを上げた設問ではなかったが、「『へ』

は『に』と違って改まって使用する」とアンケート回答者が主張しているように、「目上」の人が動作の対象であると、回答者には改まった場合と感じられるのであろう。

5-3. 授受表現にともなう格助詞「へ」より「に」が優位な文

表20. 授受表現にともなう「に」が優位な文

番号	設問文	へ%	に%	差異
5	佐藤さんは田中さん（へ・に）プレゼントをあげた。	10.0	90.0	80.0
9	彼は彼女（へ・に）渡すメッセージカードのデザインを考案中だ。	19.9	80.1	60.2
7	親から子（へ・に）あげるお小遣いの限度額はいくらなのだろうか。	40.0	60.0	20.0

上記の3文は、授受表現であり、「あげる」「渡す」という動詞とともに相手（着点）を表す「に」が用いられた例である。「に」が心理的距離の近い同等あるいは対等にあたる人間関係の場合に用いられるとする仮説の2の検証例と言える。「親から子へ」の起点「から」と終点「へ」の方向性が示された文の差異が20ポイントと他の2文と比べて小さい。

5-4. 格助詞「に」と動詞「入る」の結合価が高いことを示す例

表21. 「へ」より「に」が優位な文

番号	設問文	へ%	に%	差異
13	老後の楽しみとして「日本秘湯（へ・に）入る会」に入会した。	24.0	76.0	52.0
11	見学者として賃貸住宅（へ・に）入る時、注意点がいくつかある。	26.2	73.8	47.6
10	今年の春からパリの大学院（へ・に）入ることになりました。	28.4	71.6	43.2
12	引っ越しで賃貸住宅（へ・に）入る時、注意点がいくつかある。	29.5	70.5	41.0

上記の4文は、格助詞「に」と動詞「入る」の結合価が高いことを示す例である。動詞の特徴にもよるが、所属や入室・入居、入浴など密着性が高い場合の例であり、「に」が密着性を表現するという仮説1を検証する例とも言える。同じ密着性でも所属と入浴、入室・入居では、密着性の意識・イメージが異なると思うが、本調査結果は、ほぼ同率の7割台となった。

本調査から判明したのは、日本語母語話者が、動作の相手が「目上」なのか「同等」なのか、文の敬意の度合いによって格助詞を使い分けている可能性があるということである。

物理的にも心理的にも「に」に密着性があるのに対して、「へ」は方向性を示し、物理的にも心理的にも動作主と対象との間の距離感があり、その分だけ改まり感も生ずると考えられる。

6. 今後の課題

本稿では、日本語母語話者による格助詞の使い分けについてアンケート形式を用いて仮説の検証を試みた。村上(2011)の調査結果を追試する形でアンケート調査を実施した。村上(2011)の調査のサンプル数は、447であったのに対して、本調査ではサンプル数が638となり、より高い信頼性が得られた。今後、さらに本調査を超える回答数を集め、信頼性を高めていくことも考えられるが、限られたサンプル数であっても、推計学の観点から一定の法則性は見出すこと

ができるとの確信を得ている。というのも本調査では、村上（2011）の調査の4分の1以下のサンプル数から始めて、徐々に回答数を増やしてきたが、その間「に」と「へ」の比率の割合が示す傾向が、いずれも近い値を示していることが確認されたからである。

本調査結果では、授受表現にともなう「に」が優位な文が確認されたが、村上（2011）の調査結果では「おまえを嫁（へ・に）もらう前に、言っておきたいことがある」という設問文を設定し、「に」97.3%対「へ」2.7%という結果を得ている。同設問文は、さだまさしの『関白宣言』の歌詞の一部であり、設問文として不適切との判断から、本調査では除外した。また、同設問文中の「嫁へもらう」は誤用との声もあり、「に」97.3%は当然とする判断もあった。ここからは、格助詞「に」が内から外へも、逆の外から内へも使えるのに対して、「へ」は内から外という方向性を内包しているのではないかとの見方もできる。本調査でも格助詞「に」と「入る」の結びつきが強いことが確認できた。もちろん格助詞「へ」も「入る」との結びつきが2割台で確認できたが、格助詞「へ」と「出る」類の結びつきも調査する価値がありそうである。

アンケートの設問のどちらが正しいのかを基準に格助詞を選択している回答者もいたようだが、正誤判断というよりは、日本語母語話者が、普段格助詞をほぼ無意識に使用しているため、隠された規則性（hidden rule）があるのではないかとの観点から検討を進めた。「に」と「へ」以外にも格助詞「に」と「と」の使い分けについても研究方法を精査し、調査と検討をする必要があると思われる。

【参考文献】

- 北原博雄（2007）「日本語における、空間表現の項性と移動動詞句の限界性」『聖徳大学研究紀要 人文学部』第18号、pp.65-72
- 社団法人日本語教育学会（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店
- 益岡隆志・田窪行則（1987）『日本語文法セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版
- 村上智美（2011）「格助詞の使い分け—「に」「へ」「を」「から」「と」について—」山口大学 人文学部林伸一研究室編『現代日本語文化論』第3号、pp.122-145、現代日本語文化研究会
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
- 森田良行（2007）『日本語質問箱』角川ソフィア文庫
- 森山卓郎（2000）『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房

【参考URL】

- 池上秋彦、金田弘、杉崎一雄、鈴木丹士郎、中嶋尚、林巨樹、飛田良文『小学館-コトバンク-』
<http://kotobank.jp/word/%E6%A0%BC%E5%8A%A9%E8%A9%9E>

(カク・ケツ)

(はやし・しんいち)

別添資料 1

格助詞に関するアンケート調査

1. あなたがよく使用する格助詞を一つ選んで○をつけてください。

- 1) 絵を壁 (へ・に) かける。
- 2) ふりかけをご飯 (へ・に) かける。
- 3) 友達 (へ・に) かける言葉が見つからない。
- 4) ご遺族の方 (へ・に) かける言葉が見つからない。
- 5) 佐藤さんは田中さん (へ・に) プレゼントをあげた。
- 6) 生徒が校長先生 (へ・に) 花束を差し上げた。
- 7) 親から子 (へ・に) あげるお小遣いの限度額はいくらなのだろうか。
- 8) 社員から部長 (へ・に) 提出する書類が山のようにある。
- 9) 彼は彼女 (へ・に) 渡すメッセージカードのデザインを考案中だ。
- 10) 今年の春からパリの大学院 (へ・に) 入ることになりました。
- 11) 見学者として賃貸住宅 (へ・に) 入る時、注意点がいくつかある。
- 12) 引っ越しで賃貸住宅 (へ・に) 入る時、注意点がいくつかある。
- 13) 老後の楽しみとして「日本秘湯 (へ・に) 入る会」に入会した。
- 14) 息子の名前の一部を母方の祖父 (から・に) もらった。
- 15) 妻 (から・に) もらうバレンタインのチョコレートは格別だ。

2. 何かお気づきの点、またはご意見がありましたらご記入ください。

国籍 () 母国語 () 語

出身 () 都・道・府・県

性別 (男・女) 年齢 (10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代・80代以上)

職業 (学生・社会人・その他)

ご協力ありがとうございました。